

モーツァルトの断片 ～その 2～

ジョージ・セル編曲：チェロ協奏曲 ニ長調 K.314 のアダージョ楽章

野口秀夫

はじめに

2002 年はウクライナに生まれアメリカで活躍したチェロの巨匠エマーヌエル・フョイアーマンの生誕 100 年であった。11 月にはフョイアーマン生誕 100 年記念国際チェロ・コンクールがベルリンで開催され、その課題曲の選択肢の中に「ジョージ・セルがフョイアーマンのためにモーツァルトのフルート協奏曲を編曲したチェロ協奏曲」があった^{注1}。

モーツァルトのチェロ協奏曲 ニ長調 K.314 はジョージ・セル編曲・カデンツァ、エマーヌエル・フョイアーマン運弓・運指で 1941 年にニューヨークの楽譜出版社 G・シャーマー社から出版されている^{注2}。その演奏が CD で聴けるようになったのはこのコンクールのおかげであり、日本盤ではごく最近のことなのである。

2009 年 7 月に HMV 等のウェブサイトでもソニー・ミュージック社の輸入盤新譜情報として次のような宣伝文が掲載された^{注3}。「緩徐楽章である第 2 楽章はチェロに適さないため、ヴァイオリン協奏曲のためのアンダンテ イ長調 K.470 (断片) を使用し第 2 楽章 (主題の続きと展開部はセル作曲?) としていて、何ら違和感のない作品に聴こえます。」

ヴァイオリンのための協奏曲のアンダンテ イ長調 (断片) K.470 といえば自作品目録に主題 4 小節だけが残っており、1785 年 4 月 1 日 (ウィーンで) 作曲。楽器編成は 2 Ob、2 Hr、2 Vn、Va、Bs とされているものである^{注4}。

ヴァイオリンのための協奏曲のアンダンテ イ長調 K.470

おそらくレーオポルトと一緒にウィーンに来て、1785 年 3 月に演奏会を開いたザルツブルクのヴァイオリニスト、ハインリヒ・マルシャンがヴァイオリンのための協奏曲 K.218 を演奏するに際して、その第 2 楽章のために新たに書かれたものであろうと推測されている。これをセルがどのようにひとつの楽章に仕上げているのか、大いに興味をそそられた。

結論を先に言おう。これはガセネタであったのである。セルは第 2 楽章に K.470 など使っていない。セルの編曲によるチェロ協奏曲に関する情報はきわめて少なく、まるで伝言ゲームのように少ない情報を受け継ぎ受け継ぎして解説がなされてきた。そこでは安易な引用でこと足れりとする無邪気な解説者たちが、恣意的な解説者の罠にまんまと嵌まり込んでいく様子を手に取るように見ることができる。

1. ジョージ・セルの楽譜に寄せたアルフレート・アインシュタインのレトリックな序文

シャーマー社から 1941 年に発行されたピアノ・リダクション版にはアルフレート・アインシュタインによる序文が載せられている^{注5}。原文は英語である。

「協奏曲作品において、モーツァルトが魅力的な成果をもたらさなかった楽器は [中略] チェロであった。モーツァルトの熱心な賛美者でかつ真の音楽家が、この気の毒な境遇を改善して、モーツァルト作品によってチェリストの貧弱なレパートリーを豊かにすることを試みるなら、それは冒流行為だろうか？」

この質問に然りと答えて、モーツァルトがフルートのために作曲した協奏曲をチェロのために書き直すのを承認しがたいと考えている純粹主義者がいるかもしれない [中略]。しかし、彼らは、モーツァルト自身が最後の協奏曲の 1 つを書いたときのことを考えるべきである——それはクラリネットのための協奏曲だが (K.622) ——元々バセットホルンのために書かれたものであった；また彼らは以下のことを考慮すべきである。ここでチェロの

ための協奏曲になったフルート協奏曲 (K.285d 以前は 314) が元々フルートのための協奏曲ではなく、オーボエのためのものだったということである。オーボエ版はハ長調で、1777 年にイタリア人のオーボエ奏者ジュゼッペ・フェルレンディスのためにザルツブルクで作曲された；それはモーツァルトと父親の手紙では“フェルレンディス協奏曲”としてしばしば言及されている。[中略]

さらには、この協奏曲のアンダンテ楽章が他の二つの楽章と違ってチェロへの転用に適していないため他の緩徐楽章——モーツァルトが 1772 年に作曲したディヴェルティメントからのアダージョ (K.131) ——に置き換えられるというのは冒流行為であろうか？これについてもまたモーツァルトは酌量できる先例を提供した。彼は以前の作品から楽章を取ってきて、再びそれらを後の作品に使用しないほど創造力に富んでいた。それどころか、1783 年 [ママ] に彼は、ヴィオッティのヴァイオリン協奏曲に新たに作曲したアンダンテ楽章 (K.470) を挿入した。ヴィオッティのオリジナルが彼にとって適切に見えなかったからである。彼はミヒヤエル・ハイドンの交響曲のためにアダージョの序奏を書いた。ともかく、“新しい”チェロ協奏曲は純然たるモーツァルトの作品である。」

ここでアインシュタインはセルの弁護をするためにモーツァルトでさえオーボエ協奏曲のフルート協奏曲への流用(編曲)をしたのではないかと、楽章が適切でなければ新たな楽章に差し替えさえしたのではないかと回りくどく述べているのである。この中でモーツァルトが新曲の楽章に旧作の楽章を流用したことがないと言っているのに、セルが第 2 楽章をモーツァルトの旧作である K.131 から編曲しているのを弁護することにならないではないかと反論すれば、それはセル自身の旧作ではないのだから見当違いだという答が返ってくるのであろう。いずれにせよアインシュタインの序文はモーツァルトの専門家以外にとっては持って回った分かりにくい文章となっている。ガセネタ発生の温床はこの序文にあると言って良いと思われる。

2. マット・ハイモヴィッツ盤の怪

世界初録音を謳っているトランザール社 (2002 年発売) のハイモヴィッツ盤 CD に付されているレミ・ヤコブ執筆の解説は以下の通りである^{注6}。

「指揮者ジョージ・セルはいくつかの協奏曲楽章を使って新しい作品を作り上げることが冒流なのかどうかを問うた。ジュゼッペ・フェルランディス [ママ] のために書かれ、後にフルート協奏曲ニ長調 K.285d となったオーボエ協奏曲 ハ長調 K.314 が元々はチェロのために作曲されたと信じたセルがそれをその楽器のために移したのはもったもなことである。しかし、作業を進めるうちに緩徐楽章がチェロには不向きであることが分かり、あちこちを探したのであろう。彼はモーツァルトが 1785 年 4 月におそらくヴィオッティのある協奏曲の同様の楽章を置き換えようと意図して作曲したアンダンテ (K.470) を使うことでその問題を解決した。[中略] このようなわけで偉大な学者で文筆家であるアルフレート・アインシュタインが指摘したように新しいチェロ協奏曲は“純然たるモーツァルトの作品”である。」

原文はフランス語である。レミ・ヤコブはスペイン語の本“La Sinfonía” (1976) を書いているほどの経歴の持ち主であるが、なんともいかわしい解説を書いたものである。アインシュタインの序文を読んでいるのは末尾の引用から明らかであるにもかかわらず、ほとんど全文に亘り捻じ曲げて書いている。順に、①冒流かどうかを問うたのはアインシュタインであってセル本人ではない。②「K.285d 以前は 314」を律儀にフルート協奏曲とオーボエ協奏曲に割り振ったのは唯一のご愛嬌。③オーボエ協奏曲が元々はチェロのために作曲されたとセルが信じたなどはどこにも書かれていない。④緩徐楽章に K.470 を使ったなどとアインシュタインは書いていない。K.470 は別の行に違う意味で使われているに過ぎない。⑤アインシュタインは“純然たるモーツァルトの作品”を強調してはいない。これらは早とちりなのだろうか。いや、そうではないようだ。K.470 の年代をアインシュタインが間違って 1783 年と書いているのを 1785 年 4 月と正確に訂正して書いているので少なくともモーツァルト事情を調べた上での執筆であることがうかがえる。

CD を聴いてみよう。第 2 楽章は当然 K.131 の第 2 楽章アダージョで演奏されている。第 1 ヴァイオリンのパートをオクターヴ下げてチェロが弾いている。

The image shows a musical score for a piece titled "Adagio". It consists of four staves: Violino I, Violino II, Viola I, II, and Violoncello e Basso. The key signature is one sharp (F#) and the time signature is 3/4. The score is divided into four measures. Dynamic markings include *f* (forte) and *p* (piano). The Violino I part starts with a forte *f* dynamic. The Violino II, Viola I, II, and Violoncello e Basso parts have alternating dynamics of *p* and *f* across the measures.

単に羊頭狗肉であると一蹴するだけでなく皆さんも怒っていただきたい。レミ・ヤコブはCDを聴かずに解説を書いたのであろうか。あるいは聴いていてもK.131とK.470の区別が付かない人なのであろうか。断じてそうではあるまい。K.470が1785年4月に作曲されたことを調べたほどの人は、K.470の録音がかつてなされたことはなくCDが発売されたとなればモーツァルトファンが必ずやコレクションに入れようと群がってくることを知ったに違いないから、確認をした筈なのである。

3. マット・ハイモヴィッツ盤のレビュー記事から伝言ゲームが始まる

ブレア・サンダーソンによるハイモヴィッツ盤のレビュー記事を引用しよう^{注7}。

「チェリストのマット・ハイモヴィッツとシュテファン・ザンデルリング指揮ブルターニュ管弦楽団による2曲のハイドンのチェロ協奏曲は活気に満ちた演奏によって——このライブ録音は前上方に設置されたマイクによる不必要に耳障りな音質のために理想的とは言えないまでも——立派なCDとなっている。近接録音から常に聞こえる樹脂を擦り落とすような音でいららせずに、ハイモヴィッツの確固として自信に満ちた演奏が意図する効果を鑑賞するためにはボリュームをいくらか絞る必要がある。

しかし、既にハイドンの協奏曲の愛蔵盤を持っているほとんどのリスナーはハイモヴィッツが弾くモーツァルトのチェロ協奏曲 二長調（むしろオーボエ協奏曲 八長調 K.314からの2つの楽章およびアンダンテ K.470のジョージ・セルによる編曲）の世界初演録音を聞くためにとにかくスキップすることであろう。チェロのソロはオクターヴ下げられ弦楽器群の倍音と同じ範囲に置かれ、この配置により突出を吸収する傾向が出てくる以外は音楽自体他のすべての点で変更はない。音質に関して、この録音はいくらかこもったようなトーンが特に望ましくはないものの、ハイドンの表現よりは耳障りではない。再生上の問題に関してならこのCDで納得できるが、モーツァルト／セルのCDとしてさえ、最初の選択としてはお薦めではない。（オール・ミュージック・ガイド）」

ブレア・サンダーソンはおそらくK.131とK.470の区別が付かない人なのであろうが、レミ・ヤコブとおなじ穴の貉になってしまった。

4. 国際コンクールでこの曲を演奏したチョウ・チンによる国内盤での情報追加

国内盤としては最初のCDが2002年の国際チェロ・コンクールでの受賞者の一人である趙静（Jing Zhao）の演奏でビクターエンタテインメント社から2006年に発売された^{注8}。《ジャクリヌへのオマージュ》と題されたこのCDには「デュ・プレの演奏に触発されたチョウ・チンはデュ・プレが果たせなかったと言われるモーツァルトのこの曲のレコーディングを恩師ゲリンガスのタクトのもと、気心の知れたオーケストラと実現させ [中略] た」ものである書かれており、これは初めてもたらされる業界情報であるが、真偽のほどは追跡できない。

曲は以下の通りである。

- I. アレグロ・アペルト（モーツァルト：チェロ協奏曲 二長調 K.314（編曲、カデンツァ：ジョージ・セル））
- II. アダージョ（ディヴェルティメント K.131 より）（モーツァルト：チェロ協奏曲 二長調 K.314（編曲、カデンツァ：ジョージ・セル））

III. アレグロ (モーツァルト：チェロ協奏曲 二長調 K.314 (編曲、カデンツァ：ジョージ・セル))

第 2 楽章にカデンツァがあるかのごとき表現を除けば表記は全く正確である。伝言ゲームから影響を受けていない点で立派といえば立派だが、解説文はフルート協奏曲のことを主に述べているのみでチェロ協奏曲としての解説が乏しいことから手抜きであることに変わりはない。

5. 最新の CD ソル・ガベッタ盤 (輸入盤)

2009 年 7 月にソニー・ミュージック社の輸入盤新譜情報として HMV あるいは TOWER.JP のサイトに載った宣伝文は次のとおりであった^{注9} (勿論日本語である)。

「ソル・ガベッタの第 5 弾アルバムとなるウィーン古典派時代のチェロ協奏曲集。[中略] モーツァルト (1756-1791) はチェロ協奏曲を作曲しませんでした。このアルバムでは 20 世紀を代表する巨匠指揮者で日本でも人気のあるジョージ・セルがフルート協奏曲第 2 番 (オーボエ協奏曲が原曲) をチェロとオーケストラのために編曲した作品* (映画「本当のジャクリヌ・デュ・プレ」でクラシック・ファン以外にも知られるようになった不世出のチェリスト、ジャクリヌ・デュ・プレが録音を熱望しながら果たせなかったといひます) を収録しています。[後略]

*ジョージ・セルは、フルート協奏曲第 2 番は元々チェロのためにモーツァルトが作曲したのではないかと考えて編曲したといわれています。ただし緩徐楽章である第 2 楽章はチェロに適さないため、ヴァイオリン協奏曲のためのアンダンテ イ長調 K.470 (断片) を使用して第 2 楽章 (主題の続きと展開部はセル作曲?) としていて、何ら違和感のない作品に聴こえます。(ソニー)

ジャクリヌ・デュ・プレの噂話はチョウ・チン盤からの受け売り。セルがモーツァルトのフルート協奏曲を元々チェロのために作曲した、K.470 を第 2 楽章に転用したというのはレミ・ヤコブからの受け売りであり、いよいよ日本のモーツァルトファンまでもが混乱に陥られるに至った。

2009 年 7 月 27 日に発売された CD にはハンス＝ゲオルク・ホフマンが執筆した解説が載っており、我々は二重に裏切られることになる。原文はドイツ語である^{注10}。

「モーツァルトは時間がないため注文主の目をくまますことにし、彼のオーボエ協奏曲をハ長調から二長調に移調しソロパートに若干の追記を行った。このことが指揮者ジョージ・セルにアイデアを与えた：もしオーボエ協奏曲がフルートで演奏できるのなら何故チェロで試してみないことがあろう。セルはモーツァルト学者のアルフレート・アインシュタインの協力を得てオーボエ協奏曲 K.314 のチェロ版が出来上がった。しかし、セルとアインシュタイン両者は協奏曲の緩徐楽章がチェロにそぐわないと気づき、ヴァイオリン協奏曲 K.470 からのアンダンテを頼みとした。ここでは [敢えてそれを使わず] ハープシコード奏者でピアニストのセルジオ・チオメイがスコアを新たに研究し、チェロで演奏できるオーボエ協奏曲 [K.314] の緩徐楽章の版を作成している。

チェロにそぐわない K.314 の緩徐楽章をチェロで弾くようにしたという解説の説明は単純すぎて解説になっていない。一方「もしオーボエ協奏曲がフルートで演奏できるのなら何故チェロで試してみないことがあろう」という部分はアインシュタインのオリジナルに近い。そうでありながら K.470 の部分では伝言ゲームの被害者になってしまっている。

K.470 を聴こうとしてこの CD を購入した人はこの CD だけが K.470 を使っていないのだと残念がり、ほかの CD を求めるかもしれないが、実は K.470 の転用は存在しない「ないものねだり」であると教えられれば、宣伝に騙されたと憤慨するに違いない。

現在、HMV あるいは TOWER.JP のサイトには改訂された宣伝文が載せられており、この CD で K.470 を聴けると信じて購入することの防止はできるようになったが、セルが K.470 を転用していたという事実に反する記述はいまだに訂正されていない^{注11}。

「ジョージ・セルは、フルート協奏曲第 2 番は元々チェロのためにモーツァルトが作曲したのではないかと考えて編曲したといわれています。ただし緩徐楽章である第 2 楽章はチェロに適さないため、ヴァイオリン協奏曲のためのアンダンテ イ長調 K.470 (断片) を使用して第 2 楽章 (主題の続きと展開部はセル作曲?) を編曲しましたが、当録音では、

フォルテピアノも担当しているセルジオ・チオメイがフルート協奏曲第 2 番の第 2 楽章を元にチェロとオーケストラ版に編曲しています。(ソニー)」

6. ソル・ガベッタ盤 (国内盤)

2009 年 8 月 26 日に発売された日本盤を入手するつもりは私にはないので、レコード芸術 2009 年 10 月号の歌崎和彦氏の新譜月評を引用しよう^{注12}。伝言ゲームは果てを知らない。「モーツァルトのフルート協奏曲第 2 番は、作曲者自身がオーボエ協奏曲から編曲したものであるが、ここで演奏されているのはそのフルート協奏曲を名指揮者ジョージ・セルがさらにチェロ協奏曲に書き換えたものである。ただ、セルは緩徐楽章はチェロ向きでないと考えて、ヴァイオリン協奏曲のための《アンダンテ》K.470 (断片) をその代わりに転用したが、ガベッタはそれを使わず、元のフルート協奏曲第 2 番の緩徐楽章をチオメイが編曲したものを演奏して、そのアイデアをさらに徹底させている。」

7. 演奏比較

最後に演奏を比較しておこう。

マット・ハイモヴィッツ盤は重厚なチェロ演奏と厚みのあるオーケストラ (チェンバロも参加) 伴奏によりしっかりとしたテンポでニュアンスも細かくダイナミクス幅の広い曲に仕上げている。オーボエ協奏曲やフルート協奏曲を思い出させないオリジナルのチェロ協奏曲ではないかと思わせる演奏と言える。

チョウ・チン盤は小振りのスッキリとしたオーケストラに乗って弱音を丁寧に演奏している。第 1 楽章、第 3 楽章でセルのカデンツァ (それぞれ 1 分 41 秒および 50 秒) を使用していることから最も正統的な演奏といえよう。オーボエ協奏曲やフルート協奏曲の面影がそこかしこに見え隠れするのはハイモヴィッツ盤と対照的である。

ソル・ガベッタ盤は小編成のオーケストラが粘っこいリズムと躓くようなリタルダンドを多用するが、快速で進むためチェロが歌えないばかりでなく刻みを綺麗に表現できていない部分がある (因みに 3 者の第 1 楽章の演奏時間を比較すると順に 8 分 01 秒、8 分 02 秒、7 分 27 秒である)。ソロ楽器が上昇音形を繰り返しそれぞれの最高音を強調するストレッタ風の部分ではテンポの快適さが功を奏しチェロで小気味の良い効果を発揮している。フルート協奏曲第 2 番をチオメイが編曲した緩徐楽章はそれなりに危なげないが聞かせどころが見当たらない。セルが避けた理由もまさにその一点ではなかったか。

なお、第 1 楽章第 28 小節 3, 4 拍が 16 分音符なのは旧全集に代表される往時の解釈をセルが取り入れているに過ぎない。新全集ではフルート協奏曲が 16 分音符、オーボエ協奏曲が 8 分音符となっている^{注13}。

結論

セルはモーツァルトのクラヴィーアとオーケストラのためのコンチェルト・ロンド イ長調 K.386 へのカデンツァを作曲している^{注14}。アルフレート・アインシュタインが当該曲を補作したときに協業した賜物である^{注15}。さらにチェロ協奏曲への編曲ではディヴェルティメント ニ長調 K.131 の第 2 楽章を転用するというアドバイスをアインシュタインから受けたのかも知れないが、このディヴェルティメントにセルが愛着を持ち、ディヴェルティメントでは唯一の録音があるということは知っておくべきであろう^{注16}。チェロ協奏曲を筆頭に以上はセルのモーツァルトへの愛着が垣間見られるいくつかの例となる。

一方、アインシュタインがセルを弁護するために使ったレトリックは今日では古ぼけてしまっている。オーボエ協奏曲をフルート協奏曲に編曲したのはモーツァルト本人ではないとも近年言われている。また、K.470 がヴィオッティの協奏曲のためのものではなく、マルシャンが K.218 を演奏するためのものであろうということも近年の研究からの結論である。学者は不利な立場に置かれていると言わざるをえない。

だが CD の解説者および音楽産業当事者は気楽な稼業でいいのだろうか。世界中で K.131 と K.470 の取り違えは今後も続くであろう。だが、そもそもこれらの CD はいかほど売れ、いかほど解説が読まれるのであろうか。

【注釈】

- 注 1 : 《フォイアーマン生誕 100 年記念第 1 回コンペティション 2002 年 11 月 22 日》サイト
<http://klassik-in-berlin.de/seiten/frames-artikel-de.html?artikel/feuermann-de.html>
- 注 2 : W.A. Mozart, Concerto in D major, K.314, trans. By G. Szell, ed. E. Feuermann (New York: G. Schirmer, 1941) (貸し譜)。ピアノ・リダクション版は Mozart - Concerto in D For the Violoncello With Piano Accompaniment (Schirmer's Library of Musical Classics, Vol. 1591) by George Szell (transcription and cadenzas) (Editor), Emanuel Feuermann (bowing and fingering) (Editor)。
- 注 3 : 現在は修正されている。注 11 を参照。
- 注 4 : NMA X/33 Abt. 1: Eigenhändiges Werkverzeichnis (Albrecht [Albi] Rosenthal und Alan Tyson, 1991)
- 注 5 : オーケストラ版 (現在でも貸し譜) はスコアとパート譜のセットであり持て余すゆえ、1950 年にリプリントが出たピアノ・リダクション版を探したが既に絶版であった (2006 年のエマーヌエル・フォイアーマン・グランプリでもこの曲が課題曲のひとつになった。募集要項にはピアノ・リダクション版が Kronberg Academy で入手可能とある。おそらく応募者限定でコピーを配布したのであろう。<https://www.kronbergacademy.de/cms/deutsch/spitzenfoerderung/grand-prix-emanuel-feuermann-2010/teilnahmeregeln-2006.html>)。楽譜の入手はさわめて難しいことが分かった。古書を扱っているサイトにもない。図書館に関しては、先ず日本の図書館にはない (民音音楽資料室、国立音大附属図書館、東京藝大附属図書館など)。第 2 次世界大戦の最中、アメリカから楽譜を輸入することなどありえなかったからであろう。しかし、不思議なことに米国の図書館よりも大洋州や欧州の図書館が多く所蔵している。次は著作権が問題となる。大英図書館と交渉したが、出版後 100 年経過していない著作物のコピーを依頼する場合には何らかの著作権料を徴収すると詳しく説明された。そこで楽譜ではどうかということになり別途調べてもらうと楽譜は全くコピー禁止なのだそうである。「閲覧は自由だからいつでも見においで」と鰐膠も無く言われてガックリ来た。しかも、大英図書館の OPAC では 1950 年のリプリント版に関し "The second movement has been replaced by the adagio from Mozart's Divertimento in D, K.131" と書いてあり、これは 1941 年には K.470 だったが、1950 年に K.131 にしたとも読めるので余計調べたくてたまらなくなるのであった。
 楽譜のコピーが著作権法上許されないのなら、楽譜の中の文章部分だけのコピー依頼は可能ではないかと思ひ、序文だけの入手を University of Canterbury (ニュージーランド) の図書館に依頼し、やっと本件の全貌が判明したのであった。当図書館の協力を感謝する。
- 注 6 : Booklet description by Rémy Jacobs from the CD; Haydn: The Cello Concertos; Mozart: Cello Concerto; Performer: Matt Haimovitz, Orchestre der Bretagne, Sanderling; Label: Transart TR121, DDD, 2002
- 注 7 : Review to the above CD by Blair Sanderson from All Music Guide
<http://www.answers.com/topic/haydn-the-cello-concertos-mozart-cello-concerto>
- 注 8 : 《ジャクリーヌへのオマージュ》モーツァルト：チェロ協奏曲 二長調 K.314、フランク：チェロ・ソナタ イ長調。趙 静 (チョウ・チン) (チェロ)、ゾリステン・アパッショナート・アンサンブル、デイヴィッド・ゲリングス (指揮)、松本和将 (ピアノ、フランク)。VICC60549。解説は伊熊よし子。なお、ビクターエンタテインメント (株) に対し、K.131 と他社が掲げている K.470 との相違理由についての質問を 2009 年 7 月 11 日から 7 月 30 日に亘って 3 回問い合わせを試みたが梨の籟である。結果としてはこの CD が最も正当であったのではあるが。
- 注 9 : 現在は修正されている。注 11 を参照。
- 注 10 : Booklet description by Hans-Georg Hoffmann from the CD; Sol Gabetta - Hofmann / Haydn / Mozart"; Performer: Sol Gabetta (Cello), Kammerorchester Basel, Sergio Ciomei; Label: RCA 88697547812, DDD, 2008
- 注 11 : HMV ONLINE サイト <http://www.hmv.co.jp/product/detail/3629017> あるいは TOWER.JP サイト http://www.towerrecords.co.jp/sitemap/CSfCardMain.jsp?GOODS_NO=1965240&GOODS_SORT_CD=102 を参照。オリジナルの宣伝文が「セルは第 2 楽章では K.470 を編曲して使っており何ら違和感のない作品に聴こえます」であったのに関し、CD 入手後 (株) ソニー・ミュージックに「K.470 は録音されていないではないか。すぐに提供宣伝コメントを修正すべき」とのクレームをしたところ「情報を最初に作成した時点では、海外からアートワークが未着で、第 2 楽章もジョージ・セルの編曲のものと思ひ、このような資料になってしまいました、アートワークが到着し第 2 楽章はセルジョ・チオメイの編曲でフルート協奏曲第 2 番をそのままチェロとオーケストラ版に編曲していることが判明しました。[中略] 販売店のサイトに掲載されておりますテキストにつきましては、担当者より訂正の依頼をさせていただきます」と丁寧な回答があり、再発防止の約束も頂いた (2009 年 7 月 31 日)。しかし、本質的な問題、セル編曲の第 2 楽章が K.131 なのか K.470 なのか、に関してはソニー・ミュージックでもそれ以上の深追いはできなかった。
- 注 12 : 音楽之友社、レコード芸術 2009 年 10 月号、p.127
- 注 13 : 新全集校訂報告によればフルート協奏曲の自筆譜は残っていない。18 世紀のおそらくヴィーン由来の筆写パート譜では第 1 楽章第 28 小節 3, 4 拍が 16 分音符であり、一方アロイス・フックス・コレクションにあるスコアでは 8 分音符である。新全集が前者に拠った理由は明確ではない。オーボエ協奏曲は 9 小節の自筆譜のほかには 18 世紀のヴィーン由来の筆写パート譜があるのみであり、そこでは当該部分が 8 分音符なのである。同じ部分に違う音形を採用するのは解せないことである。
- 注 14 : マリア・ジョアン・ピリス (ピアノ)、テオドール・グシュルバウアー指揮、リスボン・グルベニアン財団管弦楽団の録音 (1974 年) で聴くことができる。
- 注 15 : Rondo für Klavier und Orchester K.V. 386 / W.A. Mozart ; rekonstruiert und herausgegeben von Alfred Einstein ; mit einer Kadenz von Georg Szell ; zwei Klaviere zu vier Händen (Universal Edition -- Nr. 10766, 1936)
- 注 16 : Symphony no. 28 in C major, K. 200 (189k) ; Symphony no. 33 in B-flat major, K. 319 ; Divertimento no. 2 in D major for flute, oboe, bassoon, four horns and strings, K. 131 / Wolfgang Amadeus Mozart. (Sony Classical)

(2009 年 9 月 21 日作成、2009 年 9 月 27 日改訂)